

クリオ

May 2007 vol.21

占奪する社会 ——世界史を理解する新しい方法—— デイヴィッド・デイ／訳：矢吹啓
The days with the Days 近藤和彦

古代ローマの対外クリエンテラ
——パトロキニウムから見る共和政末期から元首政初期の対外政策—— 伊藤雅之
18世紀におけるドイツ系移民とペンシルヴァニア植民地 鱷淵秀一
ヨーゼフ2世の政策とガリツィア・ユダヤ人社会 小金澤葵

17世紀パリにおける篤信家ネットワークの編成
——聖体会と貴顕信心会を中心に—— 坂野正則・山本妙子

インタビュー：佐藤彰一教授に聞く 聞き手：クリオ編集部，構成：小澤実

ドイツにおける博士号取得の回顧と展望 森田直子

【特別寄稿】

デイヴィッド・デイ (LaTrobe University, Australia) / 訳：矢吹啓 (東京大学大学院 博士課程)

占奪する社会 ——世界史を理解する新しい方法——

SUPPLANTING SOCIETIES: A DYNAMIC FOR UNDERSTANDING WORLD HISTORY

世界の歴史は、移動しゆく人々の歴史である。例えば、ブリテン諸島へのケルト人の移動、南北アメリカへのヨーロッパ人の移動、北海道への日本人の移動、チベットへの中国人の移動、南アフリカへのバントゥー語族の移動、オーストラリア大陸へのアボリジナルの移動などが挙げられる。こうして移動する人々は、時には、それまで誰にも占有されたことのない土地に、最初に辿り着くかもしれない。しかしほとんど例外なく、彼ら最初の到来者に続いて、現住民から土地を奪い取って自身のものとするに熱中する新規入植者が現れる。新たに入植する中で、彼らは先住民を占奪する、と同時に、彼ら自身が占奪される危険から自衛する、という長期にわたるプロセスを開始する。このプロセスの研究は、歴史家が研究を進める上で一つの原動力となる。特定の社会の歴史が何世紀にもわたってどのように形成されてきたのかについて、我々の理解はより一層深まるだろう。植民地主義を、不断に境界が変化する世界の中で特定の地域を占有しようと試みるあらゆる社会の果てしない苦闘の一部とみなせば、「占奪する社会」というこの新しいパラダイムは、植民地主義に関する我々の理解をも深めるだろう。

近藤和彦 (東京大学大学院 教授)

The days with the Days

【論文】

伊藤雅之（東京大学大学院 修士課程）

古代ローマの対外クリエンテラ

——パトロキニウムから見る共和政末期から元首政初期の対外政策——

本論文は古代ローマの共和政末期から元首政初期にかけての対外政策において、ローマのパトロキニウム概念が果たした役割を問うものである。パトロキニウム概念は *patronus・cliens* による、現代の *patronage* と同様、上下関係を伴いつつも相互扶助や恩恵・報恩をその基調とする、人間同士の結合の一種であったが、ローマ人と外国勢力との間のそれは特に、対外クリエンテラと呼ばれる。ローマの対外戦略については、Luttwak の所謂、「科学的」かつ一貫性ある領域政策と、それに対し帝国の長期的戦略の欠如を論じる Isaac らの議論が知られているが、対外クリエンテラはこの問題の中でどのように位置づけられるべきだろうか。本稿では、同時代人であるリウィウス、タキトゥスそしてカエサルの記事を中心とした概念分析と、当該時代にローマが大規模かつ長期的に軍事・外交政策を展開した、東方世界およびブリタニアの事例研究を通して、ローマの拡大戦略の一貫性を論じていく。その結果、ローマ人がどのような意図・方法で帝国を拡大し、またその際外部の人々がローマ人からどのように見られ、扱われたかに迫ることができるであろう。

鰐淵秀一（東京大学大学院 修士課程）

18 世紀におけるドイツ系移民とペンシルヴァニア植民地

「大西洋史」という視点からアメリカ植民地時代史を見直すとき、移民史を従来のアメリカ史的観点から解放することが出来る。1683 年から 1775 年までの間、10 万人を超えるドイツ系移民がイギリス領北アメリカ植民地へ移住し、その多くがペンシルヴァニア植民地に集中した。彼らはヨーロッパ規模のジャーマン・ディアスポラの一支流に過ぎなかったが、ペンシルヴァニア植民地においては人口の三割を占める大きな勢力となり、集住して自らの言語や慣習を維持し、ホスト社会への同化を拒んだ。従来の移民史研究は、移民たちのアメリカナイゼーションを主眼とする研究であり、ドイツ系移民たちが植民地社会の展開にどのような影響を与えたのかという問いは不問のまま残されている。そこで本稿では、ドイツ系移民の大量流入が植民地社会に与えた変化や植民地人の反応、さらに植民地社会の変動の中での移民と植民地政治の関わりを通して、18 世紀においてドイツ系移民がペンシルヴァニア植民地に与えたインパクトを検討する。いわば、ペンシルヴァニア植民地の「ジャーマナイゼーション」に注目することで、18 世紀のアメリカ植民地社会の形成を捉え直そうとする試みである。

小金澤葵（東京大学大学院 修士課程）

ヨーゼフ 2 世の政策とガリツィア・ユダヤ人社会

ガリツィア研究はこれまで長く、十九世紀後半のナショナリズム研究の枠内で進んできた。そのため、ガリツィア社会におけるユダヤ人を、他の諸集団とは敵対関係にあるとする前提があった。さらに、ガリツィアの後進性、貧困の問題がユダヤ人問題と重ね合わされ、ユダヤ人の貧困化、ユダヤ人共同体の衰退が自明とされた。他方で分割前のポーランド・ユダヤ人研究では、領主-ユダヤ人関係が、領主の恣意的な支配、やむを得ない共犯関係とする伝統的な解釈から、社会経済的な分析を通して、双方向的な協力として肯定的に捉え直されてきている。本稿では分割後のガリツィア社会への考察にもこの視点が有意義だと考え、領主-ユダヤ人関係、地方当局-ユダヤ人共同体関係に対するヨーゼフ二世期の政策を再検討する。従来の研究では、ヨーゼフ二世の統治下でガリツィア・ユダヤ人社会は破壊されたと考えられてきたが、実際には伝統的なユダヤ人社会が存続したことを論ずる。

坂野正則・山本妙子（共に東京大学大学院 博士課程）

17世紀パリにおける篤信家ネットワークの編成 ——聖体会と貴顕信心会を中心に——

17世紀前半のパリでは、対抗宗教改革による刷新運動が本格的に導入され、篤信家 *Dévots* と呼ばれる都市の有力指導者層の多くは、カトリシズムを倫理的基盤としつつ、治安維持や都市共同体運営を行う。他方、宗教生活において、彼らは内省を重視する信仰実践に共鳴し、信徒と聖職者から構成される宗教結社に加入し、慈恵活動や布教活動を通じて自発的で多様な人的ネットワークを都市社会内部に構築する。本論文では、17世紀パリに存在した二つの有力な宗教結社である聖体会と貴顕信心会に焦点を当て、篤信家ネットワークの編成過程を分析する。この二つの結社は、ほぼ同時期に活動を開始し、しばしば会員の重複が見られ、相互補完的に活動したと言われる。しかし、前者が1660年代に王権から解散させられたのに対し、後者は近世を通じて篤信家の信心会として活動を継続する。この組織の運命の対照性は、当時の都市社会における複雑な宗教事情を反映していると考えられる。そこで本論文では、二団体の規約を比較分析し、組織形態の一致と相違を明らかにし、続いて、重複する会員の人的構成と彼らの人物誌を調査することで、二団体の関係性を検討する。その後、聖体会解散をめぐる篤信家の対応を政治的・社会的文脈から解釈することを通じ、ネットワークの再編成を考察する。こうした三つの視角から篤信家を分析することで、王国の首都における彼らの日常的な宗教実践、王権との関係、さらに都市内部のカトリシズム刷新に果たした彼らの役割を把握することができる。

【インタビュー】

佐藤彰一教授に聞く／聞き手：クリオ編集部、構成：小澤実（東京大学大学院 博士課程）

国内外で精力的に研究成果を発表し続ける、西洋初中世史研究の重鎮である佐藤彰一・名古屋大学教授へのロング・インタビュー。風光明媚な山形県余目での少年時代、東京での学生生活、フランスへの二度の留学をへて、世界各国での研究発表、綺羅星のようなフランス中世史家たちとの知的交友、長年にわたる大学での教育経験、日本学士院賞受賞作でもある、トゥールのサン・マルタン修道院で作成された会計文書の分析に基づく博士論文の執筆、そして21世紀COE「テキスト科学の構築」プロジェクト・リーダーへといたる道程を語り尽くす、対話的自分史の試みである。最新の研究動向を貪欲に吸収しつつも、事実の発見という歴史学の根本作業に絶えず立ち戻る佐藤中世学の基本姿勢が、いかにして形成されてきたのか、このインタビューの読者は理解することになるだろう。これから研究者を志す若者に向けてのメッセージも、添えられている。

【留学体験記】

森田直子（新潟大学 特任助教）

ドイツにおける博士号取得の回顧と展望

本誌16号に「ビーレフェルトの一冬（2001-2002年）」と題し、ドイツ留学の体験記を書かせてもらった。その際、博士論文をどこでどう完成させるのかという具体的問題は、意識的に棚上げしていた。結局、「長い灰色の単調な」北ドイツの冬をさらに4度経た2006年6月、ビーレフェルト大学歴史・哲学・神学学部で *Promotion*（博士号取得）を終えた。この間を振り返る機会を与えられた本稿では、まず、ドイツの大学における *Promotion* のあり方について簡単に紹介する。つぎに、ドイツ語による論文執筆開始前、執筆中、執筆後と、少しずつ変化をしながらも不断に存在した、「歴史学の博士論文を外国語で執筆すること」についての心理的葛藤を取り上げる。この個人的な葛藤は、ヨーロッパで博士号を取得するメリットとデメリットとして、ある程度客観的に整理され得よう。最後に、ドイツにおける *Promotion* を、日本とドイツのアカデミズムと関連させて独自に総括する。